アナクサゴラスの〈知性〉

——目的論とのかかわりにおいて——

廣川洋一

I

アナクサゴラスは、いわゆるソクラテス以前の哲学者のなかでも評価の際立って難しい人物の一人といえよう。[1] 彼がはじめて〈知性〉(*Νοῦς*)を宇宙の運動因、整序原理、支配原理としたことは、哲学の歴史において特別な意義を与えることになる。たしかに、支配し(*κρατεῖ*)、舵取る(*κυβερνᾷ*)神的な原理への着案は、すでに遠くイオニアの哲学者たちの思考のうちにも容易に見てとることができるだろう。[2] しかし、その原理を〈知性〉の名で呼んだこと、その原理を端的に〈知性〉としたことに私たちは特別な注意を払う必要があると思われる。ほかならぬ〈知性〉が、アナクサゴラスにおいて、宇宙の支配原理とされたことは、哲学史におけるひとつの顕著な事件であったのである。[3]

「すべてをひとつに秩序づけ、すべての原因となるものは〈知性〉である、と語るのを聞いて喜びを感じた」(*Phd.* 97 C)とプラトンが語り、「〈知性〉をこそこの世界のすべての秩序と配列との原因であると言ったとき、この人のみが目ざめた人で、これまでの人びとはまるでたわ言を言っていたものかともみえたほどである」(*Metaph.* 984 b 15–18)とアリストテレスが感想を述べたのも、この点にたいする彼らの積極的な評価とみることができるだろう。しかし、

すでによく知られているように、彼らの〈知性〉にたいする最終的評価はむしろ否定的なものであった。

「アナクサゴラスにしても、彼はあの〈知性〉を宇宙創造の説明のためにただ機械仕掛けの神として使い、物事がどのような原因で必然的にそうあるのかという難問で行きづまった場合にそれをかつぎ出してくるが、その他の場合には、事物の生成の原因をすべて〈知性〉より以外のものに帰している」(*Metaph.* 985 a 18-21) というアリストテレスの評価や、「この書物を読みすすんでいくにつれ、〈知性〉をなんら役立てず、もろもろのものごとをひとつに秩序づけるいかなる原因も、それに帰することなく、かえって空気、アイテール、水、その他にも多くのまさに場外れるものを持ちだして、それらを原因だとする、そのような男を見つけたときに」(*Phd.* 98 C) 大い失望した、と語るプラトンの言葉が端的に示すとおりである。(4)

プラトンやアリストテレスの、アナクサゴラスの〈知性〉にたいする期待と失望は、〈知性〉が一見、プラトン・アリストテレスの目的論的思想体系における役割にきわめて適合するようにみえながら、その実、たんに宇宙に最初の動を付与するものとしての役割を与えられているにすぎず、実質的な働きを何らなしえぬ存在と判定されたことに帰因するといえるだろう。「存在する事物が存在しあるいは生成するのは、〈知性〉を終りとして目的として、つまりこれ（知性）のためにであるという意味でではなく、これから始まるという意味（すなわち始動因として）これをあげているにすぎない」(*Metaph.* 988 b 9-11) というアリストテレスの批評をここに引用することができる。(5)

たしかに、〈知性〉については、現存するアナクサゴラスの真正断片から、運動の原因者としての性格を、私たちも容易に確認することができる。(6)

また〈知性〉は回転運動全体を支配したから、原初において回転運動が生じたのだ。最初　小さな領域から回転運動が生じたが、今では　より広範囲にわたって回転運動が行われ、これから先も　いっそう広い範囲にわたって回転運動が行われることだろう。……中略……それからまた、今　星辰、太陽、月　そして分離された空気とアイテールが行っている回転運動をも〈知性〉が秩序づけた。回転運動そのものが分離をひき起したのだ。そして　濃密

なものが希薄なものから、熱いものが冷いものから、明るいものが暗いものから、乾いたものが湿ったものから分離されたのだ。

(fr. 12. 12–15, 19–25)

〈知性〉が運動を創始したとき、〈知性〉は、動かされたものの一切から離れ去り、〈知性〉が動かしたかぎりのものはすべて分離された。ものが動かされ分離されるうちに、回転運動は、さらにいっそう分離をひき起こすことになったのだ。

(fr. 13)

アナクサゴラスの体系において、〈知性〉が事物を「支配し」「秩序づける」原理と語られながら、私たちの目におそらく最も際立つのは、むしろ宇宙の原初に回転運動を与える運動付与者としての役割りである。〈知性〉は全宇宙にたいする究極的原因者、すなわち責任者とみなされながら、他方で、宇宙に回転運動がひき起されたあとは、以降の宇宙生成の全過程にわたって、純粋に機械論的な力が作用しつづけるばかりで、〈知性〉そのものの働きはきわめて影薄いもの、名目にすぎないものともみられる一面をもつといわなければならない。私たちは、右に引用した断片からも、そのありようを察知することができるだろう。

断片13は、とりわけ運動創始以降の〈知性〉の役割について、ほとんど決定的ともいえる証拠を私たちに示すもののように思われる。

〈知性〉が運動を創始したとき、〈知性〉は動かされたものの一切から離れ去り、〈知性〉が動かしたかぎりのものはすべて分離された。

(fr. 13. 1–2)

運動を創始したあと、〈知性〉は動をあたえられた万有から、わが身を切り離し、あるいはむしろ離れ遠ざかり、身を引いた(ἀπεκρίνετο)、と解することができるなら、[7] 私たちもまたプラトン・アリストテレスの先ほどの批判と失望に容易に共感を覚えることができるだろう。

ものが動かされ分離されるうちに、回転運動は、さらにいっそう分離をひき起すことになった。(fr. 13. 2–3)

現存の断片からみるかぎり、ここに引用した第13断片こそプラトン・アリストテレスの不満と失望を正当化する唯

一最重要な断片といわなければならない。しかし私たちは、アナクサゴラスの〈知性〉が、動を創始するや、動を授けられたもののすべてから離れ遠ざかり、これらと無縁のままに身を持し、動を与えられた宇宙万有にたいしていわば責任無きあり方を真に保持しつづけるのであるかを、もういちど、アナクサゴラスの全断片を省みながら、ここに問いかえしてみたい。

Ⅱ

〈知性〉が万有に動を与えるや、ただちにそれら動くものどもから離れ去り、これらのものに関与し支配することから超越し、この意味で宇宙万有の整序者としての役割を放棄しているという批難はしかし、いくらか性急にすぎる声であったように思われる。断片11は、「あらゆるもののうちに、あらゆるものの部分が内在するが、〈知性〉は別だ」として、〈知性〉の絶対的純粋性を主張しているが、これにつづいて、「だが、その〈知性〉もまた内在するようなものがいくつかある」とも述べていたからである。

この「〈知性〉が内在するいくつかのもの（οἷσι δὲ καὶ νοῦς ἔνι）」とは具体的に何か。この問題は、断片12の「さらには、魂をもつかぎりのものすべてを、より大きなものも より小さなものも もろともに、〈知性〉は支配する」（fr. 12. 11-12）とある箇所と関連させて考察するのが古くからの慣わしであり、[8] 私たちもこれに従ってよいだろう。つまり、「魂をもつかぎりのもの（ὅσα γε ψυχὴν ἔχει）」、すなわち生命をもつものどもにたいしては、〈知性〉の支配（νοῦς κρατεῖ）は変わることなく依然として存続していると、私たちは解することができる。[9] 原初に動を与えたまま、いわば引退し、宇宙の支配者、整序者としての責任を問われていた〈知性〉は、少くとも生命をもつ、有機的世界においてなおその支配の力を保持しつづけるとみることができ、私たちはこの点においてプラトン・アリストテレスの批評をやや性急で的確さを欠くものと判定しなければならない。生物の大小を問わず、およそ生命をもつかぎりのものどものうちに〈知性〉は内在する、生物界全体のうちに配分されている、と語られたが、同じ断片のうちに、宇宙

万有の支配者としての〈知性〉と、人間・生物のうちに内在する知性との同質性がつぎのように明示されていたことにも注意しておく必要があるだろう。[10]

そして〈知性〉は、すべて、より大きなものも、より小さなものも同じである（ὅμοιος）。　（fr. 12. 27-28）

宇宙論的〈知性〉と、人間・生物の知的能力との同質性の主張は、〈知性〉の、生命をもつ世界全体にたいする関与のある方式を私たちに示唆するように思われる。およそ生命あるものは、人間から動物、おそらく植物にいたるまで、〈知性〉の一小部分を受け取ることにおいて、〈知性〉の関与と支配を受けるのである。

〈知性〉によって動を与えられた宇宙万有は、少くともその無機的・非生命的世界の段階までは、その回転運動によって機械的・必然的な分離の過程がおのずから進行し、〈知性〉の積極的な役割をここに認めるのは困難のようにみえるが、しかし、生命ある世界の段階においては、事態はこれとは別なものになることが、右の検討から推測されるだろう。この問題を考えるために、断片4aを取りあげてみたい。

人間どもも魂をもつかぎりの他の動物たちも混合によって形造られたのだ。そして、ちょうど　今日の私たちのもとでのように、〔かの〕人間どもには人の住む国々や開墾された田畑があり、またちょうど　今日の私たちのもとでのように、かの人間どもには日があり月がありその他のものがあったのだ。そしてまた、大地はその人間どもに、多くの、しかも多種多様なものを稔らせ、彼らは、それらの稔りのうち　いちばん役に立つものを家に貯え、利用するのだ。さて、これが分離ということについて私が述べてきたものなのだ。　（fr. 4a 4-11）

この断片は、人間をはじめ他のあらゆる生物が分離による宇宙生成のある過程において形成されたことを示すとともに、人間のみならず人間の文化・文明もまた、宇宙論的な「分離」の過程において生成したものであることを語るものとみてよいだろう。[11]「あらゆるもののうちに　あらゆるものの部分がある」（fr. 11）とする絶対混合と、分離による事物の生成の説に従うなら、人間のもろもろの業――国家、田畑、家――すなわち人間の文化・文明もまた原初の混合のうちに内在（ἐνεῖναι fr. 4a 1）しており、宇宙生成の一環として分離によって結果するとみる考え方を、私

たちはとくに怪しむ必要はないであろう。生き物、人間の生成までは、事物の生成を、必然的な回転運動、渦動の結果と認めることはたしかに容易であろう。しかし、生物・人間の誕生以後生成するにいたるもの、人間のもろもろの業、「国家」や「田畑」がたんに渦動の結果生じたと考えることは、ほとんど不可能であろう。なぜなら、生命をもつかぎりのものこそ、例外的に知的能力をそのうちに内在させるものであり、したがって宇宙的な〈知性〉の積極的な関与なしに、たんなる回転運動の必然的過程からは、けっして生成しえなかったはずだからである。私たちはここに、アナクサゴラスにおける、知性を宿すにいたった生命あるものにたいする特別な関心を思うべきである。〈知性〉を分与された生物、とりわけ人間は、他のすべての、回転運動の必然的結果としてのみ生成するにいたるともみられるもろもろの事物とは、おのずから異質なもの、特別なものとして在るとみなされているのである。以下には、主として人間のもろもろの業の成立について考えてみることにしたい。

すでに述べたように、人間のもろもろの業は本来原初の混合のうちに内在し、宇宙生成の分離の過程の結果生成してくる一面を一方ではもちながら、しかし他方で、それらの業がたんに機械論的分離の結果としえないもうひとつの面をもつという意味において、アナクサゴラスの宇宙生成論は回転運動の必然的な力によって一元的にすべて説明しつくしうる体系とはなっていないといわなければならないだろう。それは必然的な回転運動の力とともに、〈知性〉の支配と指導をあらかじめ要請する体系なのである。人間が享受する国家社会、家、田畑もたんに渦動の結果生じたものではない、それらはいずれも知性を宿すにいたった人間の、ほかならぬ〈知性〉そのものの働きによって、あるいは少くとも〈知性〉そのものの何らかの積極的な関与によって産み出されたものとみるべきである。いいかえるなら、人間たちに「国家」の形成を指導し、「田畑」の造成や「大地の稔り」の貯蔵を教えたのは、ほかならぬ〈知性〉なのである。(12)

原初の渦動をひき起した〈知性〉は、アナクサゴラスの哲学体系において、たしかに全宇宙にたいして究極的責任を負うべき立場にあるとみることはできるだろう。しかし、すでに省みたように、渦動の生起以後は、その過程全体

にわたって、純粋に機械論的力が作用し、〈知性〉そのものの働きはきわめて影薄いものになっていることがしばしば指摘されてきた。しかし、人間の文化的営為がたんに機械的・必然的渦動の結果生じたものではないことを省みた私たちにとって、〈知性〉が宇宙生成への関与においてそれほどにも無責任、無関心、あるいはそれほどにも無力であったとして、その非を鳴らすことはかならずしも当を得たことではないように思われる。少くとも、生物・人間の生成以降、〈知性〉の支配と指導力は、原初の万有に回転運動を与えたときにもまして、ふたたび強力に働いているといってよいだろう。

だがわれわれ（人間）は、自身の経験、記憶、知恵、技術を活用する。 (fr. 21 b)

右の断片にもみられるように、全宇宙のいっさいを「支配し」（κρατεῖ fr. 12. 12）、「知り」（ἔγνω fr. 12. 16）、「秩序づける」（διεκόσμησε fr. 12. 18）と語られる〈知性〉は、今やとりわけ人間においてその関与の力を増すようにみえる。

Ⅲ

〈知性〉が原初の万有に回転運動を与えるや、ただちに引退し、以後万有の関与をやめるにいたるとする意見を私たちはとらず、少くとも生物・人間の世界において、〈知性〉はふたたびその指導力を発揮するとみたが、この問題とのかかわりにおいて、なおもう一点別な断片をここに引用し、その意義について考えてみたい。[13]

だが、つねにあるものである〈知性〉は、他のすべてのものもまたあるところに、すなわち、まわりを取り囲む多（原初の集塊）のうちにも、また　これまで結合されたり、分離されてきたもののうちにも、今なお　確かにあるのだ。 (fr. 14)

この、アナクサゴラス研究において比較的等閑視されてきたかにみえる第14断片は、これを、当面の問題視野におき入れるとき、私たちはその事柄の重大さに驚ろかなければならないだろう。〈知性〉が動を創始したあと、動かされたものの一切から、「身を引き離し」「離れ去り」「引退した」とされ（fr. 13. 2）、その無責任ぶりが問題とされた

〈知性〉はしかし、この断片では、時間的にも――「つねにある（ἀεί ἐστι）ものである〈知性〉」――、空間的にも――「他のすべてのものもまたあるところに（ἔνα καὶ τὰ ἄλλα πάντα）」――今もなお　確かにある（ὁ δὲ νοῦς τὸ κάρτα καὶ νῦν ἐστιν）と明言されていたからである。この章句は何を意味するか。生き物・人間のうちにのみ内在する（ἔνι fr. 11）と語られた〈知性〉は、ここでは明白に「まわりを取り囲む多」のうちにも、「これまで結合されたり、分離されてきたもの」のうちにもあるとされている。前者すなわち「まわりを囲む多」とは宇宙生成における原初の集塊であり、後者は原初の集塊の分離がすすんで一定の形状を備えるにいたった事物（πρωσκριθείσι）と、原初の集塊の分離が始まってまもないために、あるいはすでに一定の形状を備えていた事物の分離が進んだために、目下のところ一定の形状をとるにいたらぬ事物（ἀποκεκριμένοις）と解することができるだろう。

このようにみるなら、〈知性〉は、原初の万有に渦動を与えるさいと、生物・人間においてのみ関与するにすぎない、と解することは、なお的確さを欠く見方といわなければならない。〈知性〉は、宇宙生成の原初からその全過程を通じて、あらゆる事物に内在する――「〈知性〉は、他のすべてのものもまたあるところに　今なお　確かにある」（fr. 14 1-2）――と語られているからである。この問題に立ち入る前に、もういちど、アナクサゴラス哲学の基本原則に触れておきたい。アナクサゴラスによれば、「あらゆるもののうちに、あらゆるものの部分が内在する（ἔνεστι）」（fr. 11）。しかし、〈知性〉のみはその例外である（fr. 11）、すなわち「〈知性〉は無限で、独立自存し、何ものとも混合せず、ただひとり　それ自身で　自らのもとにある」（fr. 12 1-3）とされる。そして、すでに私たちが省みたように、〈知性〉を分けもつものの存在が例外的に認められ、それが生物・人間にほかならない、とされている。

しかし、すでにみたように、宇宙生成の原初からあらゆるもの――生命無きものと生命もつものとを問わず――のうちに〈知性〉が内在していた、とすれば、〈知性〉は他の何ものとも混合せず、生物・人間のうちにのみ例外的に内在すると述べる断片11、12と矛盾することは明らかである。アナクサゴラス思想の基本原則を語る、これらの断片の内容をすべて拒否し、断片14のそれを認める立場に依ることは、ほとんど不可能であろう。とすれば、右にみた二

つの主張をいかに調和的に解釈しうるかが、私たちの当面の課題となる。

これにたいする結論をここでは先に述べておこう。字義通りの意味で「混合すること」すなわち「内在すること」によって〈知性〉が他の事物に関与する仕方をとるのは、生き物・人間における場合にかぎられる、と私たちは考えたい。「あらゆるもののうちに　あらゆるものの部分が内在する」(fr. 11. 1-2; fr. 12. 5-6)において、また「〈知性〉もまた内在するものがある」(fr. 11. 2)において、ἐν παντὶ…μοῖρα ἔνεστι; ἔνι と表現されているのにたいして、断片14では［ὁ νοῦς］ἔστιν ἵνα…ἐν τῷ πολλῷ περιέχοντι…ἐν τοῖς προσκριθείσι……と表現されていることに、私たちは、〈知性〉の事物への関与の仕方におけるある微妙な差異を感知することができるように思われる。後者すなわち断片14においては、〈知性〉は前者におけるように、事物と混合し、それらのうちに内在する、いわば直接的な関与の仕方をもたず、むしろ、内在し混合することによってではないが、しかし何らかの仕方で、いわば間接的に関与することを、断片14の表現は示唆していると考えられる。[14] 残念ながら、目下のところ、私たちは、その関与の仕方がいかなるものであるかその内容を具体的に明らかにしえない。しかし、右の「〜においてある」と訳しうる表現がかならずしも字義通りの「内在」「混在」を意味するものでないことをここでは強調するにとどめたい。

以上のように理解することができるとすれば、〈知性〉が宇宙万有の全体について、またその過程の全体にわたって――生物・人間については例外的にその関与を強めるとしても――、全宇宙の支配者、整序者として、何らかの関与と指導とをもちつづけることを私たちは疑いえないであろう。アナクサゴラスにおいて〈知性〉は、プラトン・アリストテレスの批評のように、かならずしも全面的に無責任なありかたをとるものではなく、むしろ宇宙のあらゆる事物にたいして少くとも何らかの関与と影響力を保持しつづける存在なのである。

Ⅳ

アナクサゴラスの〈知性〉の役割についてこれまで省み、とりわけ宇宙万有との関与においてかならずしも希薄で

無力なものとはいえないことを確認したが、しかし右の説明からはなおプラトン・アリストテレスの不満と失望をいやすには充分ではないと思われるだろう。以下に、〈知性〉の宇宙万有にたいするその関与の内実について検討しておきたい。断片12のつぎの章句にまず注目しよう。

そして、混合されたもの、切り離されたもの、分離されたもの、これらのもの一切を、〈知性〉は知ったのだ。また、あろうとしていたかぎりのもの――すなわち、かってあったもの、今あるもの、これから先あるであろうもの――の一切を、〈知性〉は秩序づけたのだ。

(fr. 12. 15-19)

「一切を秩序づけた（πάντα διεκόσμησε fr. 12. 18）」において、万有を、その生成の全過程において、――過去、現在、未来にわたって――支配し指導しつづける〈知性〉を、私たちは容易に認めることができるだろう。

そして、「一切を知った（πάντα ἔγνω fr. 12. 16）」において、ここでの ἔγνω がたんに「認知」にかかわるだけでなく、むしろ「配慮する」「心に留める」の意味をもつと解しうるなら[15]、私たちは、〈知性〉の万有への関与の問題について、もう少し具体的なイメジを描くことができるように思われる。〈知性〉は、「知ること」「秩序化すること」において万有へ関与するのである。〈知性〉による万有への関与の方式は、知性そのものの名が示すように、万有を、知性に従った、つまり合理的な計画に従った配置につけることにほかならないであろう。それは、けっして盲目な仕方、アト・ランダムな仕方ではなく、一定の方向をもった仕方で――目的的に――なされる事物の配置である[16]。

この点を、私たちは彼の宇宙生成理論のうちに確認することができるだろう。「濃密なものが希薄なものから、熱いものが冷いものから、明るいものが暗いものから、乾いたものが湿ったものから分離される」（fr. 12. 22-25）と語られるように、分離もまたアト・ランダムに生じることはない。この点については、シンプリキオスがアナクサゴラスを擁護してつぎのように述べていることが思い出される[17]。「分離にさいしては、つねに反対のものどもが反対のものどもから分離されてくるのであって、偶然のものどもが分離されるわけではない、とアナクサゴラスは言っている。したがって、偶然なものどもが偶然なものどもからではない仕方で、すなわち水から肉や脳が〔分離して生成する〕

というのではない仕方で〔分離は生ずるのだ〕」。さらにまた、「いかにして毛髪が毛髪ならぬものから、肉が肉ならぬものから生ずることができようか」(fr. 10) というアナクサゴラスの言葉をもここに引用することができるだろう。宇宙万有の生成は、けっして盲目的な力にゆだねられてはいない、それはむしろ、〈知性〉によって明瞭に合理的な仕方で方向づけられているといわなければならない。アナクサゴラスにおいて、少くとも、宇宙的原理としての盲目的「偶然」を排除しようとする意志を認めることができる。

しかし私たちは、ここにいたってもなお完全には解消されないプラトンの不満をここに思い出さなければならないだろう。プラトンにとって、宇宙の秩序をつくり、すべてのものの原因となっている〈知性〉は、その秩序化がそれぞれの事物にとって最善であるように定めたのであり、したがってたんに宇宙万有の整序者としての〈知性〉を置くだけでは充分とはいえず、その〈知性〉が万有の秩序化にさいしてそう配置されることが「それら事物にとって最善であること」という〈知性〉による秩序化の原因あるいは目的が明瞭に立てられていなければならないのである。[18] アナクサゴラスの私たちに現在残されている断片には、「目的 (τελός)」も、〈知性〉が万有の秩序ある配置づけにあたって指針とすべき「最善」「より善い」「善い」(βέλτιστον, ἄμεινον, ἀγαθόν) の語句も、直接には見いだすことができない。しかし、すでに省みたように、アナクサゴラスの〈知性〉は、かつてあったもの、今あるもの、これから先あるであろうものの一切を秩序づけ、原初に渦動をひき起すことによって、宇宙万有をそれらが現にそうであるよう配置づけ支配し (fr. 12)、また生物・人間のうちに内在することによって、彼らが国家をつくり家をなし田畑をいとなみ稔りを享受する生を送りうるよう、すなわち彼らが現にそうあるよう配置し支配している (fr. 4a) ことを、私たちは思いみるべきであろう。〈知性〉は、その関与の直接・間接を問わず、なんらかの仕方で、宇宙自然のすべてについて、配慮し支配する存在なのである。

〈知性〉による、万有の現にそうある配置づけは、けっして偶然や恣意の結果としてそうなったことを意味しない。それは、知性に従い、理にかなった仕方で配置づけられているのである。万有がほかならぬ〈知性〉そのものによっ

て配置づけられたとする思想は、宇宙万有がその知性を分けもつ人間にとって、可知的であることを告げるだけではおそらくない。〈知性〉による万有の合理的配置づけ――秩序化――こそが、他のいかなる宇宙的原理によるそれよりも、いっそう善美なものとする思想が、少くとも implicit には、アナクサゴラスのうちにあったことを私たちは認めてもよいだろう。

ここでもういちど断片4aをあらためて引用し、私たちの当面する問題とのかかわりにおいて考えてみよう。（傍点部分の訳解が先ほど引用した場合と異っていることに注意されたい）。

そして、ちょうど　今日の私たちのもとでのように、〔かの〕人間どものために、人の住む国家や開墾された田畑があり、またちょうど　今日の私たちのもとでのように、かり人間どものために、日があり月がありその他のものがあったのだ。そしてまた、大地はその人間どものために　多くの、しかも多種多様なものを稔らせ、彼らは、それらの稔りのうち　いちばん役に立つものを家に貯え、利用するのだ。さて　これが分離というものについて私が述べてきたものなのだ。つまり、分離は、私たちのもとにのみ生じるものではなく、他所（よそ）においてもまた生じうるものなのである。

（fr. 4a 5-12）

宇宙生成的「分離」が他所においてもまた生じうる、という表現は、宇宙生成の全過程が、〈知性〉の全面的関与、むしろ指導のもとで――合理的計画に従って――同一の道を辿ること、その可能性を示唆するものと考えられる。[19] 私たちが国家、田畑を私たちのためになるものとして享受し、日や月が私たちに有益なものとしてあるように、（他の世界の）人間たちもまた、〈知性〉の関与の下での宇宙生成の全過程においてそれらのものを、彼ら自身にとってためになるものとして所有することになる。しかし、〈知性〉のもとでの同一過程の生起という着案よりも、ここで私たちにとってさらに重大な意味をもつと思われるのは、国家も田畑もそれらはいずれも人間たちのためになるもの（αὐτοῖσιν εἶναι fr. 4a 7, 5-6）、かの人びとにとって恩恵、善なるものとして、〈知性〉の指導のもとに生み出されたとする思想である。〈知性〉の合理的指導のもとでの宇宙生成の全過程は、こうして、他の世界においても同一の道

程を辿るばかりでなく、過程そのものが、その宇宙にある事物にとってためになる仕方で進行する――その事物にとっての利益、善を目的として――ことを、この断片からも、私たちはかなり明瞭なかたちで把握することができるように思われる。

プラトン・アリストテレス的目的論のレヴェルにアナクサゴラスのそれがすでに到達していることを、ここで積極的に主張するつもりは私たちにはない。アナクサゴラスの、〈知性〉による宇宙整序の思想のうちに、explicit ではないにせよ、しかし、プラトン・アリストテレスの目指すものと実質的に同一の方向を認めうるのではないか、またそう解することによって、プラトン・アリストテレスたちのやや性急で、いく分正確さを欠いた評価から、そして彼らの言葉をほとんどそのまま受容してきた多くの追随者たちの信念から、アナクサゴラスの立場をあるていど擁護することができるように思われる。[20] かのアリストテレスもまた、やや謎めいた仕方ながら「アナクサゴラスは〈知性〉を立派で正しくあることの原因――*τὸ αἴτιον τοῦ καλῶς καὶ ὀρθῶς τὸν νοῦν*――と多くのところで述べている」(*De anima* 404 b 2) と語っていたことを私たちはここで最後に引用しておきたい。[21]

付記

プラトン・アリストテレスの引用訳文は岩波版『プラトン全集』『アリストテレス全集』によった（一部改変）。記して謝意を表わす。

注

(1) cf. Barnes, J., *The Presocratic Philosophers*, II, London, 1979, p. 16.

(2) 現存断片のうち、この思想を端的に語る最古のものとして、イオニア派のアナクシメネスのつぎの断片を引用することができるだろう。

空気であるわれわれの魂が、われわれを掌握（支配）している（*συγκρατεῖ*）のと同じように、気息と空気が宇宙全体を包み囲んでいる（*περιέχει*）。 (fr. 2)

またアリステレスによれば、アナクシマンドロスの「無限なもの（*τὸ ἄπειρον*）」もまた、すべてのものを包み囲み（*περιέχειν*）、すべてのものを舵取る（*κυβερνᾶν*）ように思われるとされ、この種の宇宙原理として、なおアナクサゴラスの〈知性〉、ヒンペドクレスの〈愛〉があげられている（*Phys.* 203 b 10–16）。ヒンペドクレスについては、fr. 17 参照。私たちはこの他にも、パルメニデスの「万物の舵取る（*πάντα κυβερνᾷ* fr. 12. 3）」宇宙的女神やアポロニアのディオゲネスの「すべての人びとがそれによって舵取られ（*κυβερνᾶσθαι* fr. 5. 3）、またすべての事物を支配する（*κρατεῖν*）」知力をもつ空気（アエール）をあげることができる。またヘラクレイイトス fr. 41 はテクストに問題があって確定が困難だが、*ὅτέῃ ἐκυβέρνησε* Diels, DK と読むなら、「万有をあらゆる仕方を通じて舵取る（*ἐκυβέρνησε*）」叡知（*τὸ σοφόν*）となり、アナクサゴラス以前にすでに〈知性〉を宇宙的原理とする着想のあったことを推測させる。

(3) Hussey, E., *The Presocratics*, London, 1972, p. 138.

(4) プラトンの批評について詳しくは *Phd*, 97 C–99 B 参照。

(5) その他、「たとえ彼らのうちの誰かが〔必然的原因以外の〕その他の原因をあげているにしても、たとえばある人〔ヒンペドクナス〕は〈愛〉と〈憎〉をあげ、ある人〔アナクサゴラス〕は〈知性〉をあげているにしても、この人びともただわずかにこれに触れるだけでただちに別れを告げているからだ」（*Phys.* 198 b 14–16）、他に *Metaph.* 985 a 10–23 参照。

(6) その他 fr. 9, fr. 14 参照。

(7) *ἀπο τοῦ κινουμένου παντὸς ἀπεκρίνετο* について解釈は二つに大きく分かれる。*ἀπεκρίνετο* の主語を *νοῦς* と解する説（e. g. Heidel, W. A., 'On certain fragments of the Presocratics' *Proceedings of American Academy Arts and Sciences*, 48 (1913) p. 731; Diels, H., et Kranz, W., *Die Fragmente der Vorsokratiker*[6] [=DK], II, Zürich, 1952, p. 39; Guthrie, W. K. C., *A History of Greek philosophy*, II, Camridge UP, 1965, p. 274 n. 2; 藤沢令夫『イデアと世界』岩波書店、1981, p. 176 と、*ἀπεκρίνετο* を非人称とみる見解（e. g. Burnet, J., *Early Greek Philosophy*[4], London, 1930, p. 260; Kirk, G. S., et Raven, J. E., *The Presocratic Philosophers* [=KR], Cambridge UP, 1957, p. 373; Schofield, M., *An Essay on Anaxagoras*, Cambridge UP, 1980, p. 154 n. 45; Sider, S., *The Fragments of Anaxagoras*, Beiträge zur klassischen Philologie Heft 118, Meisenheim am Glam, 1981, p. 104) の

二つがある。前者は、〈知性〉が動を与えられたすべてのものから、分離した（あるいは分離された）とみる説と、さらに一歩踏み込んで、〈知性〉が動を与えられたすべてのものから、離れ遠ざかり、身を引き、引退したと解して、〈知性〉の自然万有への関与を積極的に否定する解釈へと通ずるものにさらに分けられよう。後者によれば、「動を与えられたすべてのものから、分離が始まった」となる。これについて、私たちは目下のところ断定的に言明しえないが、本文での所説をすすめる上で、いわば最も不利な、〈知性〉を主語とし、「〔〈知性〉が〕離れ遠ざかった」とする見解に立って、以下に考察をつづけたい。

(8) e. g. KR, p. 376; Guthrie, W. K. C., *op. cit.*, II, p. 278; Cleve, F. M., *The Philosophy of Anaxagoras*, The Hague, 1973, p. 102.

(9) e g. KR, p. 376; Guthrie, W. R. C., *op. cit.*, II, pp. 278–79. Fränkel, H. は、〈知性〉はただ一度だけではなく、少くとも二度、別の場において最高度の仕事を遂行した、とみる。*Wege und Formen frühgriechischen Denkens*, München, 1960, p. 285.

(10) e. g. Jaeger, W., *The Theology of the Early Greek Philosophers*, Oxford, 1947, p. 164; Hussey, E., *op. cit.*, p. 140; Schofield, M., *op. cit.*, p. 16.

(11) Vlastos, G., 'Ethics and physics in Democritus', *Philosophical Review* 55 (1946), p. 53; idem, 'On the Prehistory in [Diodorus', *American Journal of Philology* (1946), p. 57. et n. 26; Fränkel, H., *op. cit.*, pp. 284–293, とくに pp. 285–86, 291–93.

(12) Fränkel, H., pp. 285–293; Fritz, K. von, *Grundproblem der Geschichte der antiken Wissenschaft*, Berlin, 1971, p. 581.

(13) fr. 14 にはテクスト上の難点があり、正確に把握しえないところがある。シンプリキオス (*In Phys.* 157.τθ) の写本テクストには ὁ δὲ νοῦς ὅσα ἐστί τε κάρτα……とあるが、このままでは意味を解すことができない。DKは、ὁ δὲ νοῦς ὃς ἀεὶ ἐστι, τὸ κάρτα…と校訂し、本文に訳出したのは、この読みに従ったものである。しかしこの案は今日からならずしも確定的なものとして受け入れられてはいないように思われる。これについて近年では、Sider, D. の ὁ δὲ νοῦς, ὅσα ἐστιν, ἐκρατήσε…と校訂する提案(Anaxagoras Fr. 14 DK', *Hermes* 102 (1974), pp. 365–67; idem, *op. cit.*, pp. 110–13) があり、これによれば、「〈知性〉はあるかぎりのものを支配し、……のところに今ある」となろう。また、Marcovich, M., の ὁ δὲ νοῦς, ὃς ἀεὶ ἦν καὶ ἔστιν, κάρτα……の校訂案（'Anaxagoras B 14 DK', *Hermes* 104 (1976), pp. 240–41) に従うなら、「つねにあったし、またあるであろう〈知性〉は、じっさい今も……のところにある」となる。Marcovich の案は、DK 案と実質的に変わらないとみてよいだろう。Sider 案もまた、〈知性〉それ自身の永遠的存在性そのものを直接強調する――「つねにある〈知性〉」(DK)」つねにあったし、あるであろう〈知性〉」(Marcovich)

――ことはないが、〈知性〉は「他のすべてのもの（＝ὅσα ἐστι＝存在するかぎりのもの）があるところに今ある」のであり、また「およそあるかぎりのものを支配する」と読むのであるから、この案はむしろ〈知性〉の万有への関与を積極的に認めようとする私たちの考えによく適合するものともいえるだろう。

(14) 「魂をもつかぎりのもの」と「原初の回転運動」にたいしては、〈知性〉は、これらをそれぞれ「支配している（κρατεῖ fr. 12. 12）」「支配しようとしていた（ἐκράτησεν fr. 12. 13）」と述べられている。この二つのものにたいする〈知性〉の関与の仕方は、「内在する」ことによる、いわば直接関与であったのではないか。こうみることができるなら、fr. 13 で〈知性〉が万有に原初の回転運動を与えたあと、動かされたもののすべてから「離れ去った（ἀπεκρίνετο fr. 13. 2）」のは、関与一般のうち、たんに内在による直接的関与をやめたことを意味することになる。また、あらゆる事物を、〈知性〉が「知的に配慮し」（ἔγνω fr. 12. 16）」「秩序づけた（διεκόσμησε fr. 12. 18）」ことは、〈知性〉の宇宙万有にたいする関与の一般的表現を示すものではないかと思われる。

(15) Sider, D., *op. cit.*, p. 104.

(16) Jaeger, W., *op., cit.*, pp. 163–64; Hussey, E., *op. cit.*, pp. 138–39.

(17) Simplicius, *In Phys.* I. 4. 174. 19–25.

(18) *Phd.*, 97 B–99 C.「いかにあるのが最善なのか」という見地からの万有秩序化の詳細については、*Tim.* 26–34, 44 D–46 A, 68 E–71 A 参照。

(19) Vlastos, G., 'One world or many in Anaxagoras?' *Gnomon* 31(1959)pp. 199–203; Schofield, M., *op. cit.*, pp. 102–103 et p. 161 n. 3. デモクリストスの「あるいくつかの宇宙（コスモス）には太陽も月もなく、……あるいくつかの宇宙には動物、植物……を欠くものがある」(DK 64 A 40=Hippol *Ref.* 1. 13. 2–3) という言葉は、おそらくアナクサゴラスを意識したものと考えられる。それは、アナクサゴラス思想にみられる目的論的傾向にたいする拒否を示したものといえるだろう。これについては、Vlastos, G., 'Ethics and physics in Democritus', *Philosophical Review* 55 (1946), p. 54 参照。

(20) たとえば、プラトン学者の Skemp, J. B. も、アナクサゴラスが〈知性〉を放擲して、たんに機械論的説明のみに頼ったとはいえず、むしろ現存の諸断片はその反対を証している、としている。*The Theory of motion in Platoś later Dialogues*, Cambridge, 1942, pp. 33-34. とはいえ、アナクサゴラスにおいて「善さ」への着目は認められるにせよ、「知性」と「善」の結びつきの必然性についての考察の欠如は、なおプラトンにとって満足のゆくものではなかったといえるだろう。

(21) なお「〈知性〉や〈愛〉を説く人びとも、これらの原因を善いものとてあげている……」(Arist., *Metaph.* 988 b 8–9) 参照。

（ひろかわ・よういち　筑波大学哲学・思想学系教授）